文京学院大学人間学部研究紀要 Vol. 21, pp. 11 ～ 25, 2020. 3

養親と成人した養子それぞれの親子関係の形成

森　和子*

血縁によらない「親子になる」経験と認識を明らかにするためにライフラインメソッドを用い，4 組の養親子を対象に親子関係の形成過程を検討した．さらに実親と養親 2 組の親を持つ養子はどのようにアイデンティティを形成していったのかを考察した．その結果，養母は「試し行動」で「とても辛い」と感じる経験をしており，特に「試し行動」の激しかった子どもを迎えた養親にとって実親からの遺伝的要素の不安や養親の元に来る前の未知の生活環境による影響が養親の受け入れを困難にしていた．養子は養親が悩んでいる時もほぼ「嬉しい」レベルで過ごしており，共に生活する中で養親の「子どもになる」ために適応していたことが推察された．「親子になる」ことは養親が「親になる」ことにいかに適応していくかが大きな課題となることがわかった．そのためには養親家庭に対する委託後と思春期の「試し行動」の時期に適切な支援の必要性が示された．養子の大事な一部であるルーツや出自に関する情報を含めたコミュニケーションが遠慮なく話せる家庭環境の中で，養子養育特有の課題「真実告知」から始まる，出自に関するコミュニケーションや「ルーツ探し」のサポートを成長に応じて養親から提供されていた．それにより養子は実親の理解が促進され，受け継いだ遺伝子と折り合いをつけながら養親とはかけがえのない「親子である」というアイデンティティが形成されてきたことが示唆された．

Key words：養子縁組，親子関係，試し行動，真実告知，ルーツ探し

1．問題と目的

厚生労働省の統計（2018）によると，社会的養護が必要な子どもたちのうち乳児院には全国に 138 ヶ所 2,851 人が生活しており，児童養護施設には 608 ヶ所，25,636 人の子どもたちが暮らしている（2017 年 10 月現在）．里親やファミリーホーム等の家庭養護で暮らす子どもとの割合は 80.3% 対 19.7% で，施設養護で暮らす子どもの数は圧倒的に多いのが現状である．子どもが健全に育つためには安定した環境と特定な養育者との愛着が不可欠であるという児童福祉の観点から施設よりは里親家庭，里親家庭よりは養子縁組家庭といった選択肢を子どもたちに保障しなければならないと国際的にも考えらえるようになっている．近年わが国でも法整備をはじめとして家庭養護の促進に向けさまざまな検討が行われ，就学前の子どもは原則施設への新規入所を停止，養父母が戸籍上の実の親になる「特別養子縁組」を 5 年間以内に倍増させ，家庭養育の受け皿を大幅に増やすことを公表した（厚生労働省，2017）．一方家庭環境の中で特定の養育者の元で暮らすことの有益性は認められてきたが，血縁によらない子どもの養育には様々な困難と課題があることや支援の必要性が実践研究や現場から指摘されている（金山・金山，2006; 宮里・森本，2012; 中山・深谷・深谷，

＊人間学部人間福祉学科

2018; 眞保，2019）．養子を迎えてからの課題として，実親との別離を経験した上で施設生活を経てきた子どもが里親や養親の元で生活を始める時に，本当に自分を受け入れてくれる人かどうか退行現象や問題行動を起こす「試し行動」（家庭養護促進協会，2007; 中山・深谷・深谷，2018）がよく知られている．また，思春期には第2反抗期と言われる親や教師などの大人に対して反抗的になるとされる時期（平石，2011）があるが，養子の場合は反抗の行為の背景に「親への反抗と実親へのあこがれと怒り」（家庭養護促進協会，1998; 森，2005）があり，それを養親にぶつけてくるために親であることを大きく揺さぶる試しの時期となることが指摘されている．本稿では第2反抗期と区別して思春期の「試し行動」と呼ぶこととする．また，養子養育に伴う課題として就学前の親子関係が落ちついてきた頃に養子に対して，養子である事実を告げる「真実告知」をすること，その後子どもの求めに応じ出自に関する情報提供などのコミュニケーション（古澤・富田・石井・塚田―城・横田，2003; 森，2005, 2017; 富田，2010）を通して，生みの親の属性や誕生・親子分離の経緯について伝えたり，生みの親との再会を企図したりする（野辺，2011）「ルーツ探し」が続いていく．本稿では「ルーツ探し」は実際に実親を探すことに限定せず，出自に関する情報提供やコミュニケーション，出身施設の訪問等も含むものとする．生みの親に思いを巡らせつつ血縁によらない親子関係にまつわる葛藤の経験をし，養子としてのアイデンティティの形成を視野に置きながら新たな親子関係を構築していくこと（Melina, 1986 伊坂・岩崎訳 1992; Brodzinsky, Schecher & Henig, 1993; Howe & Feast, 2003; 家庭養護促進協会，2004, 2007; 野辺，2011; 森，2017）が報告されている．わが国では養子養育特有のライフイベントを踏まえた長期継続的な養育プロセスをとらえた質的研究はまだ途に就いたばかりである．そのため，今後増加する養子縁組家族が家庭内で直面する「試し行動」や「真実告知」「ルーツ探し」などの実態と，その際の養母と養子の心理的側面からの支援も含めて探索する研究が求められている．そこで本稿では養親が「親になる」ことと養子が養子縁組家族の「子どもになる」ことの経験と認識について明らかにし，どのように「親子になる」のかを検討することを第1の目的とする．第2の目的は成人した養子の自己認識の実態と，実親と養親という2組の親をどのように認識し折り合いをつけて自らのアイデンティティを形成しているのかを検討したい．

2. 方法

2-1 養子の心理社会的適応のモデル

本研究では養子のアイデンティティの形成を検討するに際し，Brodzinsky ら（1993）の「養子の心理社会的適応のモデル」の成人期の達成課題，①出自に関する更なる熟慮とルーツ探し，②（子どもの誕生と関連して）未知の遺伝的な履歴と向き合う，③養子であることから生じる喪失について対処する，④成育歴を踏まえて親になることに向けて適応する，⑤親密性の発達とともに養子になったことへの意味の探求とアイデンティティの形成の5つの課題を研究枠組みとした．

2-2 データ収集のためのライフラインメソッド

養親と養子の経験と認識を明らかにするために，生活におけるライフイベントとそれに対する思いを想起しやすくするツールとしてライフラインメソッド（河村，2007）を採用した．森（2019）の研究では養母のストレス促進要因として委託後と思春期の「試し行動」の時期が明らかにされた．また，養母と養子に出現した「真実告知」「ルーツ探し」などのライフイベントとその際の養母と養子の心情を「嬉しい」「とても嬉しい」と，「辛い」「とても辛い」と主観的に評定した値を2段階で捉えた線を描いて語ってもらった．「辛い」「とても辛い」と示した時を心理的葛藤の強いストレスイベントとしてその対処方法についても尋ねた．養育におけるイベントの記入と困難を感じた委託直後と思春期の「試し行動」と養子養育特有の課題「真実告知」，「ルーツ探し」を矢印でラインに書き入れた．養母と養子により描かれたラインを合わせてペアラインを作成した．

表 1　研究協力者の背景

家族構成	養母	養子	年齢	職業	家庭に迎えた年齢	真実告知	養子縁組成立
養父・A・妹（養子）	Am 氏	A 氏	27 歳	学生	1 歳 6 か月	3 歳	5 歳
養父母・B・妹（養子）	Bm 氏	B 氏	29 歳	会社員	2 歳 9 か月	4 歳	4 歳
養父母・C	Cm 氏	C 氏	30 歳	主婦	2 歳 11 か月	5 歳	6 歳
養父母・兄（実子）・D	Dm 氏	D 氏	30 歳	学生	2 歳 6 か月	6 歳	6 歳

2–3 データの分析手順

養母と養子へのインタビュー調査の時間は 1 時間から 1 時間半程度で設定し，面接時の録音は研究協力者の承諾を得て行った．1 回目のデータ収集期間は 2017 年 3 月～ 2018 年 3 月で，2 回目は 2018 年 3 月～ 2019 年 3 月にかけて実施した．面接の場所は，協力者の希望に沿い協力者の自宅や筆者の研究室など，安全面やプライバシーの保護が保障されるようにした．

1 回目面接では，養母には不妊治療を経て養子を迎えてから現在に至るまで，また養子には記憶のある範囲で現在に至るまでの成長に伴う思いについてライフラインを描きながら想起してもらった．その後，これまでの養育・成長を振り返って記憶に残るイベントや出自に関するやりとりなど自由に語ってもらった．2 回目面接では，1 回目面接時に描写したライフラインを研究協力者に提示しながら，ライフイベントや養育のプロセスの要約を伝え修正や確認を取り，心理的側面に関する補足情報を聴取した．養子には「出自について知りたいと考える情報（Wrobel, Grotevant, Samek & Korff, 2013）についても尋ねた．

2–4 研究協力者

研究参加者の基準は，都市近郊にある Z 児童相談所から養子を受託した養親の親子で，養子に真実告知を行っている家族から 4 組を選定した．除外基準としては，真実告知を行っておらず，今後も行う意思のない養親は除外した．3 組は養子縁組後，児童相談所の里親登録を辞退しているため，児童相談所の関わりはないものである．1 組は確認の上，了承を得ている．

2–5 倫理的配慮

研究協力者には，研究目的，意義，方法，研究協力の任意性と撤回の自由，不利益が生じないこと，守秘義務，個人情報の厳守について文書と口頭で説明し，同意を得たうえで同意書に署名を得た．個人情報が記載されているデータは特定されないよう匿名化を行い，研究協力者のプライバシー保護のためデータには最小限の修正を加えてある．本研究は，2017 年 8 月に名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会にて，第 17–1010 として承認を受けたものである．

3. 結果

3–1 研究協力者の背景

研究協力者は，成人期の養子を持つ 4 組の親子である．対象とする養子は，4 人とも 20 代後半から 30 歳前半である．家族構成は，1 名は養父母と 1 名の養子であり，1 名は養父母と養父母の実子の兄の 4 名で，あとの 2 名は養父母と 2 名の養子から成り立っている．家庭に迎えた年齢は 1 歳 6 か月から 2 歳 11 か月であった．最初の真実告知は 3 歳から 6 歳で行い，養子縁組は 4 歳から 6 歳で成立している（表 1）．養子には A, B, C, D と付け，養母には Am, Bm, Cm, Dm とした．

3–2 事例の概要と養親子のライフライン

養母から語られた 4 組の親子の現在に至るまでの経過概要を示す．養母と養子のラインを重ねて描き対比したペアのライフラインが図 1~4 である．養母のライフラインは黒の線で示し，養子のラインは点線で示した．

（1）Am・A さん親子：自慢の息子が思春期になって問題行動を多発した事例

Am さんは不妊であることがわかって夫とよく話し合い不妊治療に区切りをつけ，養親として子どもを育てることを決意した．1 歳半の時に A を迎えた．「試し行動」はあったが，不妊治療に戻

りたくない思いがあったことと，養父にも助けられた．「真実告知」は 3 歳の時にして，5 歳で特別養子縁組をした．成績もよく気の利く自慢の息子だった．小 5 の後半から問題行動が始まり，中学校でもよく問題を起こした．A は家で Am さんと喧嘩をしては家出を繰り返した．児童相談所から少年鑑別所の一般相談を紹介されて通った．また昼夜逆転していて睡眠障害かもしれないと精神科を受診すると発達障害と診断された．県立高校を 1 年で退学し，通信制高校に転校した．長い浪人生活を経て専門学校に進学した．

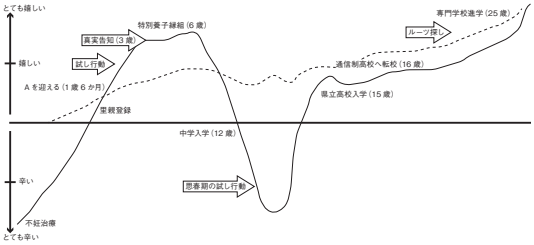

図 1　A さんと Am さんのライフライン

（2）Bm・B さん親子：孫の誕生で養子の未知の時期を埋めた事例

Bm さんは夫が不妊症と分かってどん底に落ち込んだ時に養子縁組里親を知った．B は，2 歳 9 か月で家に来て，「試し行動」もあり当初イライラしてきつい言葉を投げかけた．4 歳で特別養子縁組が通って，これで本当の親子になった，今なら言えると思いすぐに「真実告知」をした．中学生になって口をきいてくれなかったり，親なんかいらないと言われて悲しかった．高校に入ってからは部活に夢中でその頃から話をするようになる．家から離れ県外の専門学校への進学を自分で決め，現地で就職した．25 歳で結婚して地元に戻ってきて再就職し，最近子どもが生まれた．

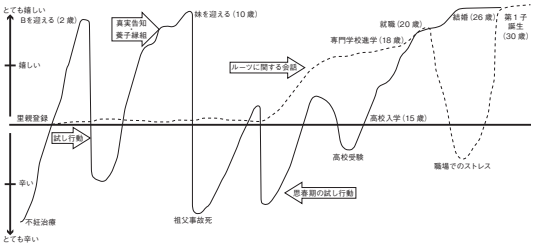

図 2　B さんと Bm さんのライフライン

（3）Cm・C さん親子：子どもらしくない言動を否定して関係が悪化した事例

Cm さんは不妊治療の結果体調を崩して治療ができなくなった時，施設で育った子どもが家庭に入っても親の役割がわからないというテレビ番組を見て里親登録しようと思った．2 歳 11 か月で C を迎える．公園で遊んでいても，乗りたそうにしている子がいたらゆずるようなところがあり子どもらしくないのが気になった．しばらくして粗相を繰り返すようになった．6 歳の時に，特別養子縁組が成立した．小学校の担任からいろいろ注意されてから厳しくいうことが多くなった．C は中学になって友達関係もよくなり，高校では部活で自分の力を発揮する．28 歳で結婚して家を出たが，養父が病気になってからは介護のために定期的に帰ってきている．

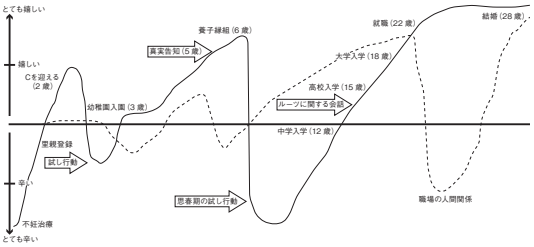

図 3　C さんと Cm さんのライフライン

（4）Dm・D さん親子：施設に帰そうかと思ったほど「試し行動」が激しかった事例

Dm さんは実子が一人いるが，兄弟を作ってあげたいと思って養親になった．家庭に来てから D は過食偏食もひどく保育園でも他の子どもにけがをさせたりした．もうこの子は施設へ帰そうと思い家族に言うと，実子や祖母から反対され思いとどまった．中学 3 年でこのままでは入れる高校がないと言われたが，良い塾に出会い県立高校の体育コースに入った．高校卒業後専門学校に行き自動車整備士の資格を取り 5 年働いてから，准看護師の養成学校に行った．今は正看護師になるために専門学校に通っている．

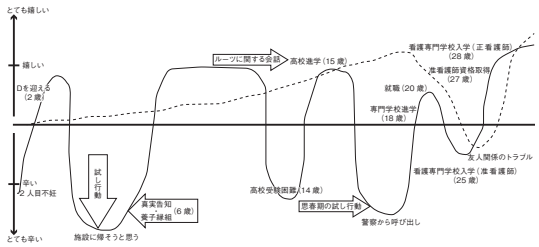

図４　D さんと Dm さんのライフライン

以上の概要から図１～図４に示された養母と養子のペアデータを概観したい．3 名の養母たちは不妊治療を行っていた時期を「とても辛い」時期であったとし，実子が 1 人いる Dm さんは「辛い」時期と捉えていた．そこから里親制度や養子縁組によって血縁によらない子どもを迎え「親になる」道が開けたことで 4 名のラインは大きく上昇した．子どもの委託直後から 3 人の養母は「辛い」とラインが下がっている. 委託後の「試し行動」の出現である．Am さんは不妊治療に戻りたくない思いと帰宅の早い夫が助けてくれて「辛い」レベルに落ちずに過している．養子がラインを描いたスタートは全員 0 以上の「嬉しい」レベルから始まっている.「真実告知」については，養母たちは養子を家庭に迎えて落ち着いてきた時期でもあり「嬉しい」のレベルで捉えていた．思春期の「試し行動」では 4 名の養母は「とても辛い」と感じるストレスフルイベントとして捉えていた．一方「試し行動」の時期を 1 名の養子だけ養母の「辛い」ラインと同調して少し「辛い」と「嬉しい」を行き来していた（図 3）が，他の 3 名は「嬉しい」レベルで推移し，施設に帰されるなどとも全く認識していなかった．その後「ルーツ探し」に関しては「真実告知」の後に出自に関するコミュニケーションが B さん，C さん，D さんはあった．A さんは実親について知りたいと思うこともなかったが，大荒れだった思春期の「試し行動」の時に養母から出自に関する情報が提供されている．3 名の養子が「辛い」に転じた時は親子関係ではなく，就職してからの仕事や人間関係に関しての悩みによるものであった（図 2, 3, 4）.

全体を概観すると子どもを迎えてからの養子養育において 4 名の養親は「嬉しい」「辛い」を行き来する大きなラインを描いていたが，養子は家庭に来てからほぼ「嬉しい」の範囲内でラインを描いていた．現時点では養母の 3 人は「とても嬉しい」というレベルに上昇しており，ほとんどの養子も「とても嬉しい」というレベルで認識していた.

3–3 養母と養子それぞれの思い

ライフラインでも明らかになった養母が養育困難を感じた委託直後と思春期の「試し行動」と，養子養育特有の課題「真実告知」「ルーツ探し」（森，2019）に焦点を当て，養母と養子それぞれの思いの語りをまとめ対比したものが表 2~5 である．養子の語りの中で説明が必要な箇所については（　）内に意味が理解できるように筆者が補足的に加筆した．委託直後と思春期の「試し行動」での葛藤解決要因には下線を引いた．本稿は，倫理的配慮から調査協力者のプライバシーを守るため個人が特定されないようデータには若干の修正を加えてある.

（1）委託直後の「試し行動」

委託直後の「試し行動」の時期を Am さんだけは，不妊治療に戻りたくない思いの方が強かったこと，夫の助けもあり子どもを迎えられて「嬉しい」という思いの中で対処していた．A さんはその頃のことに対し当時の記録を見て養母が頑張っていたと認めていた．Bm さんは子育てで疲れが溜まりイライラしていたのを，B さんは当時の親の態度は厳しかったが今思えば間違っていないと受け止めていた．Cm さんは慣れない子育てで心身ともに「辛い」経験で捉えており，C さんは養母の不安定さを感じ取り「辛い」と「嬉しい」思いに同調して上下していたが，それでも養母は自分のことを嫌いにならないと思っていたと振り返る．Dm さんは，D が来てから多くの問題行動を起こしたため施設に帰そうと思った程「とても辛い」経験であった．しかし D さんは家族から手放されると考えたことはなかったという．C さん以外の 3 人の養子は家庭に迎えられてから「嬉しい」のラインで推移していた．養育困難を乗り越える葛藤解決要因を Am さんは不妊治療に戻りたくない思いと養父の助け，Bm さんは養親の自助

表２　委託直後の「試し行動」に関する養親子の思い

養母の思い			養子の思い		
Am	嬉しい	・家庭に来てからは物をまき散らしたり，食べるのにとても時間がかかるなどの試し行動はありました．でも，これで諦めたらまた不妊治療に戻らなければならないとも思いました．当時夫は帰宅時間が早かったので帰ってきたら夫に話してストレス解消して乗り越えましたね．	A	嬉しい	・小学校のころはよい子にしていたと思いますよ．両親の知り合いとか遠い親戚などの法事とか「大人だね」って言われたりして ・（自分が来た時の）日記帳を見せてくれて一人目で超スピードで委託されて泣き止まないとか母はすごいこんなに頑張っていたんだと思いました．
Bm	辛い	・やはりＢに対して手を上げてしまうことをなんとかせねばと思いつつできなくて，思い悩んでいた頃でしょうか？Ｋの会（養親の自助グループ）を知って入会できたのは本当にほっとしました．	B	嬉しい	・委託後の試しの頃は親の態度が厳しかったなくらいの感覚で，今振り返ると間違っているとは思わないです．
Cm	辛い	・子どもらしくないのが気になったんですね．しばらくして粗相を繰り返すようになって慣れない子育てで疲れが溜まっていって……．・そのうち近所の家に遊びに行かせてもらったり，幼稚園に行くようになってずいぶん楽になりましたね．	C	辛い嬉しい	・おむつが取れなくて，トイレ大のほうをうまく言えなくてなんで言えないのと怒られていました．今と顔つきが違うんです．・怒られても，なんで怒るんだろう．普通の親子と同じで私のこと嫌いになっちゃうんだろうとか思わなかったです．
Dm	とても辛い	（Ｄが女の子に怪我をさせて）頭を下げてばかり．（中略）同居しているおばあさんは「小さい時はいろいろあるけど大丈夫だよ」って．（中略）当時12歳の長男は「僕が同じことをしたらどこに帰るんだよ」って言ったんですね．　Ｄは実親から捨てられて今帰したら２回傷つけることになるって．・「Ｄちゃんはしょうがないんだ．」そういう子なんで先生も受け入れてくれたんだと思います．	D	嬉しい	・自分としては普通だと思っていましたが，小さいときは落ち着きがなかったですね．体育が好きで，学校の環境に慣れていなかったのかもしれません．落ち着いてきたのは小６のときあたりからか．・家族から手放されると考えたことはなかったです．・けがをさせたときは反省したと思いますよ．もし返されたら今のような暮らしはできていないですよね．

グループの仲間，Cm さんは近隣の人や幼稚園や地域の社会資源，Dm さんは家族や地域，学校の理解であった．

(2)「真実告知」に関係する養母子の思い

４人の養母は児童相談所でも早期に伝えることの重要性を聞いていたこともあり６歳までに伝えている．Am さんは，３歳の時お伽話風に話している．A さんは，疑問もなく質問することもなかったという．妹が来た時も自分も養子であるとは認識していなかった．Bm さんは養子縁組が成立して法的にも親子になったという自信から「真実告知」をしている．しかし B の可愛い時を何ひとつ知らないってことが切なかったと語っていた．B さんは母から生まれたのではないことは物心ついたら知っていたという．Cm さんは１年くらいの間何度か逡巡しながらやっと「真実告知」ができたという．C さんは，母の雰囲気が違ったことを感じ取っていたが母が２人いてラッキーとポジティブに捉えていた．Dm さんも養子縁組と「真実告知」を同じ頃にしている．D さんは，言われたことはわかっていたと振り返る．

(3) 思春期の「試し行動」

思春期の「試し行動」では，４名の養母は「辛い」から「とても辛い」というレベルで経験を認識していた．それに対し４名の養子の思いは「嬉しい」思いの範囲内で若干の気持ちの揺れを上下のラインで表していた．自慢の息子が思春期になって問題行動を多発して養子にしたことを後悔するほど

表３ 「真実告知」に関する養親子の思い

養母の思い			養子の思い		
Am	嬉しい	・「真実告知」は「神様が間違えちゃったんだよ」とおとぎ話風に話をしました．A が 8 歳の時に妹が来た時に「あんたもこうきたのよ」って言ったら，目を丸くして「そうなの？」って真実告知のことは全く覚えていませんでした．	A	嬉しい	・告知に対して自分から質問することはなかったですね．・なぜか自分は両親から生まれたと思っていました．・（宿題で）親は歯切れの悪い中国の故事を使って名前の由来を書いてくれたけど，その時に合点がいきました．
Bm	嬉しい	・特別養子縁組が通って，本当の親子になった，何が起きても今なら言えると思いました．「お母さんのお腹が壊れていて入れなかったの」と言ったら,「なんでぇ, 僕は入っていたかった」と泣きましたね．大事な話だから誰にもお話しないようにしようね」って．B の可愛い時をなにひとつ知らないってことが切なかった．	B	嬉しい	・4 歳の時の真実告知の記憶はほとんどないです．ただ，物心ついたら知っていた感じです．母から生まれたのではないということを．思い返しても，施設の記憶があるようなないような．・昔の写真を見たときに，ここが施設……なんとなく記憶があるかなぐらいの認識しかありません．
Cm	嬉しい	・生んでくれたお母さんもいるけれど，今ここにいるのが本当のお母さんなんだって話しました．（中略）「C のお母さんがお母さんで，生んでくれたお母さんもいるのね」とても嬉しそうな顔をして私に擦り寄ってきたんです．1 年半くらい前に言う機会があったのにやっと言えて心のつかえが下りた感じがしましたね．	C	嬉しい	・告知の時は少し緊張してたことは覚えていています．大事な話なんだということはわかりました．母が二人いてラッキー，生んでくれることと，育てるのを 2 人がかりでやってくれて，単純に得したと思いました．・1 回目の告知も重要です．お腹が壊れていたとか親に負い目がある内容にしないほうがよいです．
Dm	嬉しい	・「D を生んでくれたお母さんは別の人だけど今はお母さんが D のお母さんだから．お腹から出てきた子じゃないけど心から出たんだよ」	D	嬉しい	・母の真実告知の説明で納得したと思いますが，当時の感情気持ちは覚えていません．（中略）真実告知で言われた意味は分かっていました．

苦悩した Am さんに対し，A さんは怒られても反省せず，鬱々して母は泣くのでラインは少し下がった．養母からは（施設に）帰る選択肢があると言われた気がするが深刻に捉えていなかった．Bm さんは，親なんかいらないといわれたことが辛かったと語り，B さんにとって中学時代の反発は一般的な思春期の反抗という程度の認識であった．Cm さんは，学校からの注意が増え厳しくいうことが多くなったことに対し，C さんは，養母がしかめっ面で怖かったことと，養親は（実）親に対する不満のはけ口になるので高校生の時に父に反発した時否定して欲しかったと振り返る．Dm さんは時々問題行動を起こすのでまだ安心はできないという．D さんは悪いことだとはわかっており，兄がかばってくれたことを覚えていた．思春期での葛藤解決要因を Am さんは児童相談所などの専門機関での相談，Bm さんは他の養親から共感的に理解をしてもらえたこと，Cm さんは教育相談などの専門家の助言，Dm さんは家族の理解と支援であった．養母の養育困難を促進した思春期の「試し行動」で助けとなった葛藤解決要因には下線を引いた．

(4)「ルーツ探し」

4 名の養母は思春期になると「ルーツ探し」のサポートを申し出ている．Am さんは，A さんが入所していた施設の場所が変わることを知り行ってみたらと声をかけた．その後施設に行った A さんは子どもたちの様子がわかり行ったことで満足している． B さんは良い体質をもらったこともあり遺伝的なつながりに興味はあるが興味の優先順位は低いという．C さんは思春期になって実母の名前などフッと聞いてきて Cm さんはドキッとする時があったが普通に話をしたと言う．現在の C さんは，実親に理解を示しつつも会う必要がないと断言した．Dm さんは，ルーツが悪いこ

表４「思春期の試し行動」に関する養親子の思い

養母の思い			養子の思い		
Am	とても辛い	・落ち込んでた時にね，辛かったけど不妊治療の辛さを思えば10分の１あの辛い不妊治療を乗り越えたから大丈夫っていう思いが浮かんできたんです．・少年鑑別所では法務技官が親身になって相談に乗ってくれて助言は自信になりました．・（精神科の）先生のこれまでの不可解な言動の説明に目からうろこでした．	A	嬉しい	・毎日もめごとがあってラインは下がりました．（中略）母は泣くしギャーギャーいうので，ここまで来るとなんで泣いているんだろうって．・警察に行ったのは大事になっちゃったなっていう感じで，一般相談もそんなに覚えていないです．（中略）深夜アニメが流行っていて，2, 3時まで起きていて．行った病院の先生がアニメをよく知っていたんですね．
Bm	辛い	・中学生になって口をきいてくれなかったり，親なんかいらないといわれたことが辛かったです．里親さんから養親の会を紹介してもらいました．仲間がいたから話を聞いてもらうだけで気持ちが楽になってホッとしたというか．ある方が（中略）特攻服を着た子どもの写真を見せられて，うちはそんなでもない大丈夫だと．	B	嬉しい	思春期の反発で中高で話さなくなりました．隠れてゲームをしたりしてたから，ほっておいてほしかったんだと思います．中学の時「どうせ俺は」と何回か言ったことかありましたけどただ言いたいだけで，（親の）本質は間違っていません．家を離れたのも当時は思春期だし構ってくれなくてもいいとこっちが無理難題を言って．
Cm	辛い	・小学校で鉛筆の持ち方がへんとかきちんと片づけができないとか厳しく言われるようになったんです．先生もわかってくれなくて，他の子どもと比較してしまったんです．欠点を見つけるとだめだって責め立てていって，Bにチック症状がでてきたんです．市の教育相談に電話したら，「順調に育ってますよ」って言われてこの子は私が受け止めてあげなくてはいけない．ありのままでいいんだと思えてすっとしました．	C	辛いと嬉しい	・母はずっとしかめっ面で怖かったですね．結構完璧主義でした．後になって肯定してくれるようになって私の味方だと信頼できるようになりましたね．・高校生の時に父に「どうせ私は本当の子ではないから可哀そうだと思っているんでしょ」と反抗しました．親を傷つけようと思って言ったんですね．否定してくれると思ったら「可哀そうだと思っている．（中略）」認めてほしくなかったです．・養親は（実）親に対する不満のよい武器になるんです．
Dm	辛い	・警察から連絡が来た時の方が辛かったです．兄が味方と思ったのは，父親からかばってくれた時ですね．・やっぱしかとなんとなく予感が，ちゃんと育っていないんじゃないかって．	D	嬉しい	・警察から連絡が来たのは，お金もなかったし……，先輩もやっているし学校のガラや環境が悪かったんです．悪いことだと思っていました．この時（かばってくれた）兄が味方であることに気付きました．

とを言ってはいけないと思っていた．Dさんは自分のいた乳児院の写真を見て行ってみたいと思っている．

3-4 養子が出自にについて知りたいと考える情報

「養子が出自について知りたい情報」（Wrobel et al., 2013）の内容，①医学的情報，②実親の現在の状況，③実親の外見，④他の子ども（きょうだい）の存在，⑤実親の性格，⑥個人が特定できる出自に関する情報，⑦養子に出した理由，⑧文化・国籍，⑨現在の居住地について調査用紙に記入後必要な場合は補足質問をした．その結果とWrobelら（2013）の結果を対比したものが表6である．①病気など医学的情報は与えられなかったので知りたい．また遺伝が関係する病気については子どもを持つにあたっても知りたいという意見もあり全員が知りたいことと考えていた．Wrobelら（2013）の調査でも男女ともに一番知りたいと思っていたことであった．Wrobelら（2013）の調査で2番目に多かった②実親の現在の状況は，1名がどんな生活をしているか程度の興味で，あとの3名は気にならないというものであった．③実親の外見は，見た目の体格や髪の色，剥げてい

表５ 「ルーツ探し」に関する養親子の思い

養母の思い			養子の思い		
Am	嬉しい	・「生んだお母さんに会いたいなら段取りするから遠慮しなくていいよ」って何度か言ったけどＡから聞いてくることはないです．・3年位前にＡのいた乳児院は今度違う場所に移転することを聞いて，言ったことがあったんです．（中略）そしたら１ヶ月くらい前に突然「行ってきた」とラインがきてびっくりしました．	A	嬉しい	・会えるなら会ってみたいとは単純に思うけど．実父をみたら将来髪の毛どうかとか．でも実親のことを気にしても仕方がないです．・施設に行ってみたことは考え深かったです．なるほどこんな所に子どもたちもいて，こういう感じで居たんだって．取り壊しになるから行ってみて良かったです．行ってみたことで満足しました．
Bm	嬉しい	・生んでくれた人は愛していたけどひとりで育てるのは無理があったから泣く泣く別れたんだよって話しました．・高校生の時に突然「俺ってどこにいたんだっけ」ってそれが最後に聞いてきたことでした．それがあったから結婚式の時にルーツのこと出会ったとき本当に嬉しかったことを手紙に書きました．	B	嬉しい	・小，中学校くらいでは，顔似ているのかなくらいで，高校以降は今だに目が良くて虫歯がなくって（引き継いだ）体質なのかなって．がんや生活習慣病とかどうかなど．・今更，それ以上聞こうと思いません．全然．20歳の時に（実親に）会いたかったら教えるよと言っていたけど，今更って．興味としてはあるけど，優先順位は低いです．
Cm	嬉しい	・「お母さんの名前，なんていうのかな？」話の続きとかではなく，フッとでてくるんです．ドキッとするときがあるけれど普通にしているようにしています．本当は知っていたけれど「知らない」と言いました．	C	嬉しい	・中学か高校性の時，「会いたければ会うこともできるけどどう思う？」と聞かれました．向こうが望むならあってもいいけど，自分がすごく幸せであることを自覚していて，もうひとりの親と会ってよいことがあるわけでないし母は悲しむだろうし．
Dm	嬉しい	・「生んでくれた人に会いたい？」って聞いて，今もし会いたいなら調べる方法があるって言ってあります．・Ｂの血のつながりのある親だから悪くは言いたくないです．・落ち込んだ時は得体がしれない，どんなものを持っているんだろうって思うこともあります．	D	嬉しい	・生みの親に会える機会があっても，今の親が親だと思っているから会いたいと思ったことがないですね．でも自分のいた乳児院の写真を見た時に行ってみたいと思いました．自分がどんなところにいたのか好奇心で行ってみたいです．その時の先生いるのかなって，その方が興味ある．

るのかなどの意見が４名からあがった．④他の子ども（きょうだい）の存在については，２名は気にしたことがないということであったが，１名は言われれば気になる，きょうだいがいると聞いていた１名は会ってみたいと思っていた．Wrobel ら（2013）の調査で３番目に多かった結果であった．⑤実親の性格，⑥個人が特定できる出自に関する情報については４名とも興味がないということだった．⑦養子に出した理由は，養母から良い情報にして聞いている．軽くは知っているが知り

表６ 養子が出自について知りたいと考える情報（Wrobel ら，2013 より作成）

項目	研究協力者（４名）	Wrobel ら（2013）の結果	
		実母（n=111）	実父（n=120）
1 医学的情報	４名	51.3%	57.3%
2 実親の現在の状況	１名	31.5%	34.1%
3 実親の外見	４名	27.9%	27.5%
4 他の子ども（きょうだい）の存在	２名	26.1%	22.5%
5 実親の性格	０名	25.2%	20.8%
6 出自に関する情報	０名	21.6%	15.8%
7 養子に出した理由	０名	20.7%	15.8%
8 文化・国籍	０名	20.7%	22.5%
9 現在の居住地	０名	19.8%	15.8%

たいと思わない．C さんは生みの親の思いは知らなくて良いという意見であった．⑧文化・国籍，⑨現在の居住地は 4 人とも気にならない，興味がないと答えていた．Wrobel ら（2013）では，③から⑨は 20% 前後の人が興味があるという結果であった．

3-5 実親と養親についての思い

4 名の養子の語りから実親と養親についての語りを抽出したものが表7である．実親については，A さんは単純に会えるなら会ってみたいが，会っても仕方ない，B さんは小学生の時に（実親の事情を）聞いたら望まれていない子どもだと思うかもしれないので，(成長してから聞いて)良かった．今更，それ以上聞こうと思わない，C さんは実親の事情に理解を示しつつも，産むことより育てることが大変だから，実親が会いたいと思っているとしたら嫌であると否定的な考えを示していた．また，D さんは保育実習をしてから，殺したりせずに施設に入れてくれた実親は正しかったかもしれないという．実親には簡単に会えるなら会ってもよいが積極的に会いたいという思いを持つ人はなかった．B, C, D さんは成人して実親の手離した状況をポジティブに理解しようとしていた．養親については，A さんは親との関係で満足していた．B さんは自分の遺伝子が繋がっている子どもがいるのは幸せと思うようになり，人の親になれたのは養親のおかげと述べる．C さんは育ててもらった事実に感謝しかないという．D さんは 20 歳過ぎてから感謝の気持ちを持ったということが語られた．

3-6 養親の現在の思い

現在の養親の思いとしては，Am さんは思春期の激しい「試し行動」を経て，血縁のないことを確認した上ではじめと違った親になったという．Bm さんは B さんに子どもが生まれるにあたって知ることのなかった B さんの赤ちゃんの時代を疑似体験できると楽しみにしていた．Cm は育てられたことが幸せで人として成長できたと振り返る．Dm さんは落ち着いたと思うと何か起こしたりするのでまだ不安が残っているようであった．

表７　実親と養親についての思い

	実親に対しての思い	養親に対しての思い
A	・会えるなら会ってみたいとは単純には思うけど．実親のことを知ったところで仕方ないですから，生んでくれた人に会いたいと思いません．	・今の親との関係で満足しています．親に愛されているという意識はないですが，愛されていないという感覚を持ったことがありません．
B	・今なら頭で理解しようとするかも，お金がなくてとか，ギャンブルでとか．小学生の時にそれを聞いたら望まれていない子どもだと思うかもしれないので，（成長してから聞いて）良かったです．今更，それ以上聞こうと思いません．全然．・目もいいし，虫歯もないので受け継いだかなと思うけど，それ以上聞こうと思わないです．	・99.9% ここの家の子なので，（中略）母は厳しかったなぐらいで，（中略）愛情の表れで，愛情を感じるように育ててくれました．・（子どもが）生まれてみて，自分の置かれた状況もそうだし，当たり前じゃないです．自分の遺伝子が繋がっている子どもがいるのは幸せだし，人の親になれたのはうちの親のおかげでもあります．
C	・高校生で生んで無理で手放したそうです．お母さん早すぎてかわいそうだったとも．・生みの親の思いは知らなくて良いです．捨てたんだから，仮に知ったところでどうにもならないでしょ．手放したくなかったのにとか，会いたいと思っている人が別にいるのかと思うのが嫌です．	・小さい頃から感謝です．親が違うことがわかって選んで育ててくれました．こんだけ大切に育ててくれるのはすごいことです．大きくなるにつれわかってきました．生みの親以上にありがたい存在です．・大切にしてくれれば本当の母なんです．・母はネガティブなことは言わなかったです．
D	・生みの親に会える機会があっても，今の親が親だと思っているから会いたいと思ったことがないです．・成長してから中絶しないで施設に入れたのは偉いと思います．育てられない状況で殺したり虐待しないで施設に入れてくれた実親は正しかったかもしれないです．育てられないならそうしたら良いと思います．	・人の子を育てるってすごいことだと思いました．周囲の友達や家族と比べても（親として）変わりがないです．感謝の気持ちを持つようになったのは看護の専門学校に行ってからですね．・家にいるのが当たり前で．聞かされなかったら母から生まれたと思っていました．今親に出会えてよかったと思っています．

表８　養親の現在の思い

Am	・どういう人生を生きていくのか私たちは太刀打ちできないです．・A とは血がつながっていないことを確認した上ではじめと違った親になりました．
Bm	・（赤ちゃんが生まれるので）私も密かにＢそっくりの男の子だったら……と思っています．Ｂの赤ちゃん時代知らないので……垣間見ることできたらなぁなんて思います．
Cm	・子どものいない時期も長く経験していて，子どもが来たから成長したし，社会とも深くかかわれるようになって，視野が開けました．・育てられたことが幸せだから，自分の生活を大切にしてほしいです．
Dm	・「よくよその子を育てて偉いね」と言われました．「私の勝手で育てているだけで偉くないよ」と言ってます．・きついメールを出すと返事がこないの．しかめっ面して黙ってこちらの言っていることに，どの位感じているかわからないです．

4. 考察

4–1 養親と養子が「親子になる」経験

養母は不妊の経験を経て，血縁によらないが「親になる」方法があることを知ってからライフラインは「嬉しい」方へと大きく上昇していた．子どもを迎えてから養母は委託直後と思春期の「試し行動」のどちらかで「とても辛い」と感じる経験であった．里親子の調査（中山・深谷・深谷，2018）では，不調となり養育返上をした人はサンプルに含まれていないにもかかわらず養育返上を考えた里親は 26.8% に上っていた．里子のあらわす行動には不遇な環境下で成長したこと（深谷，深谷，青葉，2013）や ADHD に近い発達障がいの傾向があることも指摘している（中山，2017）．本調査でも特に「試し行動」の激しかった子どもを迎えた養親にとっては未知の実親からの遺伝的要因の不安や養親の元に来る前の預かり知らない生活環境による影響が養親の受け入れを困難にしていることが考えられる．一方養子たちは，養親がどんなに悩んでいても親子関係が解消されて施設に帰されるなどとは認識しておらず「嬉しい」思いで過ごしていた．つまり手離されるなど疑問に思うこともなく子どもは養親家庭で生活することで，養親の子どもとして自分を適応させていっていたことが示されたと考える．そこで「親子になる」ということは養親が子どもの「親になる」ことに適応させていくことが大きな課題となることが示唆された. 本研究での養母たちは，「試し行動」などの困難な状況に陥いり「施設に帰す」「離縁する」という選択可能な深い葛藤に直面した時に，委託直後の「試し行動」では家族や養親の自助グループの仲間，近隣の人など地域の身近な社会資源，思春期では児童相談所や教育相談などの専門機関での相談，他の養親の共感的に理解してくれる人，家族の理解や支えなどの葛藤解決要因を得ていることが明らかになった．委託後は「子どもの主体性，能動性を重視して特に人生の初期の重要な時期に顕著にみられるアタッチメントを求める子どもへの理解とそれに対応する敏感性」（網野，2019）を養育者が培えるような視点からの支援が必要であることが指摘されている．思春期には家族や同じ養親仲間からの心理的に共感的理解を得ること，専門家からの客観的側面からの支援の必要があることが示唆された．

生涯発達の視点から一般的な子育て期女性が「現在の生活の受け入れ困難」な状況に陥った場合，「成長しなければならない」と考える人は成長の課題として「自己変容の受け入れ」を方略としての意味づけとして取る特徴がある（徳田，2004）という．本調査の養母たちも大きな葛藤を経てありのままの子どもを受け入れるという「自己変容の受け入れ」が方略として取られた時に，親として大きく成長し「血縁を超えて親になる」ことが可能になっていったと思われる．現在の養親の思いとしてはありのままを受け入れて養子を育てることができたことへの感謝と，孫が生まれることによって養子の未知の過去を埋めてくれるのではないかと将来への期待が込められた「とても嬉しい」思いで表現されていたと思われる．

今回の調査で養子を迎え逡巡しつつも養親は実親の存在を踏まえて，養子に「真実告知」から出自に関するコミュニケーションを経て「ルーツ探し」のことを見据えて考えていた．養母たちは「真実告知」の時期を家庭に迎えて落ち着いてきた時期でもあり「嬉しい」のレベルで捉えていた．C

さんが「2 人親がいてラッキー」と感じたように，森（2017）の調査でも「お腹が壊れていた」というようなネガティブな伝え方ではなく，「家族になれて嬉しい」というようなポジティブな言葉を使うことで子どもも「嬉しい」レベルで認識されることが推察された．日本財団（2016）の調査ではより早期に告知された方が幸福感が高いという結果であった．Triseliotis ら（2005）の調査では，97% の養子は告知されて安心だったという結果であった．セミオープンアダプションを実践しているケースワーカーは，早期に告知をするのは告知する養親の心理的障壁を取り除くための取り組み（ロング，2019）と指摘する．早期に告知をする理由として「告知することが義務だと思っていた」，「子どもには知る権利がある」という子どもを主体とした視点を持つことの重要性が示されている．そして具体的には，真実告知に際して養親は日頃から良い人間関係を心掛けること，養親自身が告知内容を肯定的にとらえていること，開示後の良い関係をイメージし実現できる（小泉，2018）ことも重要な点としてあげられよう．

以上から養親は養子の背後にある実親の存在を踏まえて養子に「真実告知」から出自に関するコミュニケーションを持つよう心掛けていた．「試し行動」の葛藤による「自己変容の受け入れ」を経て，「ルーツ探し」にも寄り添って養育していくことにより，その後の良好な血縁を超えた親子関係の形成につながっていったことが示唆されたと考える．

4–2 実親と養親を持つ養子としてのアイデンティティの形成

Brozinsky ら（1993）の「養子の心理社会的適応モデル」に沿って養育過程を振り返ってみたい．本調査の協力者の養子たちは 1 歳から 2 歳で養子縁組家庭に迎えられ，幼児期に新しい家庭に適応し，委託直後の「試し行動」を経て生活が落ち着いてきてから全員の養子たちは「真実告知」を受け，折々に出自に関するコミュニケーションを交わしつつ養親からは必要に応じて「ルーツ探し」の情報を適宜受けながら成長してきている．青年期における「自身のアイデンティティの感覚に養子であることを統合する」という最も大きな課題を経て，現在養子たちは成人期の発達課題を達成している途上にある．成人期の 5 つの課題の視点から，現時点での養子であることを踏まえたアイデンティティの形成の在り方について検討してみたい．

（1）出自に関する更なる熟慮と「ルーツ探し」

4 名の養母全員が出自の情報提供や会うためのサポートを申し出ている．本調査では，養子は児童期から青年期で実親のことに興味を示すやりとりはしていても現時点では実際に会いたいと思っている人はいなかった．野辺（2011）の研究では，「ルーツ探し」における養子の主観的なアイデンティティの管理は，実親と対面したグループからは「自分の DNA が知りたかった」「望まれて生まれてきたのか知りたかった」，実親と対面していないグループでは「実親に関するネガティブな情報に接触してしまう可能性」が対面しない動機の語彙として挙げられている．本研究の協力者も知りたいことは「実親の遺伝的要因（DNA）」があげられていた．実親と会いたいと思っていない養子たちは「ネガティブな情報に接触してしまう可能性」を回避する方策として「今更知っても仕方ない」と表現している可能性も考えられる．また，養子に出した理由でネガティブなことは伝えないように配慮していた養親とのやりとりから，実親が養子に出したポジティブな面をみつけ折り合いを付けようとしていることも推察された．現時点で「ルーツ探し」としては，家庭に来る前に過ごしていた乳児院での経験に A さんと D さんの 2 名は興味を示しており，A さんは実際に施設を訪問している．このことは，出身の乳児院は養親も子どもを迎えるまでに何度も通い施設の中や職員についてもよく知っており，そこで可愛がられて育ったなど，具体的にポジティブな話を養子にしてきたことで乳児院に興味を持ったのではないかと考えられる．Triseliotis ら（2005）の調査では実親とコンタクトをとることに関して，養子が感じた養親の態度は，83% が支援してくれた，喜んだなどが 83% であった．そして 76% の養親は支援して喜んでくれたという結果であった．今

回の調査でも思春期の大変な時を超えた後,「ルーツ探し」のサポートをしつつ 4 名すべての養親は「とても嬉しい」思いで捉えていた．Pacheco & Eme（1993）は, 実親を探し始めた理由として,「自らの妊娠・出産」が 25% であったという.「ルーツ探し」は 40 歳過ぎてやって来る人が多いという（徳永，2015）．今後養子が子どもを持ってから「ルーツ探し」に関する考えが変化する可能性も想定しておく必要性があると思われる.

（2）未知の遺伝的な履歴

Wrobel ら（2013）の「養子が出自について知りたいと考える情報」（表 6）の調査で 1 番多かった医学的情報は，本調査でも同様に養子の 4 名全員遺伝が関係する病気については今後子どもを持つにあたっても知りたいと考えていた．養親は養子を育てる際に特に激しい「試し行動」を示す子ども程遺伝的なことがわからないことに不安を感じていた．2 番目に多かったのは，実親の現在の状況であった．本研究の 4 名があげていたのは，体格や髪の色，男性の場合禿げているのかなど容姿に関するものであった．3 番目としては 2 名の人があげた他のきょうだいの存在である．5 歳の時本人には何も知らされずに養子に出された人が成長して実母の命が短いことを知って会いに行った時「親やきょうだいに会ってみると，こういう親，きょうだいがいるなら，こういった私がいて不思議はないのだ，ということが生理的に納得できた．地に足がついた感覚があった.」（家庭養護促進協会，1999）と言っている．養子にとって医学的情報や身体的特徴，きょうだいの情報は，養子の自己肯定感を高め自己存在の受容を促進させる要因になると思われる.

（3）養子であることから生じる喪失

C さんは，実親はどのような理由にせよ捨てたのだからその思いは知らなくて良いと語っていた．また「今更」「知っても仕方ない」という言葉も 2 人から聞かれた．養子になったということは実親から手離されたという「ネガティブな情報」から距離を置いて割り切ろうとしている人や実親が子どもを手離したことのポジティブな面を理解しようとすることで折り合いを付けようとする方略が取られていることが考えられる．成長に伴い思いが変化することも考えられる.

（4）成育歴を踏まえて「親になる」ことに向けて適応

今回の調査では，B さんだけ 1 回目と 2 回目の調査の間に子どもが生まれている．B さんは「自分の遺伝子が繋がっている子どもがいるのは幸せであり，養親のおかげでもと語っていた．成人した養子たちから「血縁関係の子どもが欲しかった」（家庭養護促進協会，1999）という声が多く聞かれる．また，親になったことで養親の大変さに気づいたということが共通した思いとして語られている．今後養子たちが自分の子どもを持つようになってから課題としてあがってくる可能性が推察される.

（5）親密性の発達とともに養子になったことへの意味の探求とアイデンティティの形成

成人期は自分が所属する社会の中で義務や責任を担い，友人や恋人，配偶者との親密な関係を築く時期で親密性の獲得が発達課題となる（Erikson, 1968）．今回の調査では全員の養子が自分の生活が恵まれていることを成長するにつれ意識し有難いと感じていた．思春期には養親と距離を置きたいと考えていた人も，今回の調査で親から愛されていると思うかという質問に対し全員がそう思うと答えた．Triseliotis ら（2005）の調査では，愛されている，自分の家族という感覚を 87% の養子は感じており，養親の 93% も感じていた．実親とコンタクトをとることに関して，養子が感じた養親の態度は，83% が支援してくれた，喜んだなどが 83% であったという．養親から愛情を込めて育てられたという思いが土台となり，改めて養親への感謝を抱いていた．養子が成長とともに養親からの出自に関する情報を含めたコミュニケーションや「ルーツ探し」のサポートがあることを踏まえ，実親の存在と折り合いをつけながらも養親とはかけがえのない「血縁を超えた親子である」というアイデンティティが形成されてきたことが示されたと考える．養子における健康的な

アイデンティティの獲得に影響する要因として，信頼にみちた家族関係，出自についてのコミュニケーション，養子であることに対する親の態度をあげている（Hoopes, 1990; Korff & Grotevant, 2011）．これらの要因を満たすことによって家族として暮らしてきた「時間の共有と関係性の構築」（和泉，2005）が促進され，非血縁の養親子でも健康的なアイデンティティの発達が促されるというカークの理論（Kirk, 1964; 1988）を支持する結果であったと考える．

本稿は質的な研究としての限界を抱えている．少数事例であることから一般化は難しいこと，研究協力者の養子は 30 歳前後で実親を探した人はいなかったことである．「ルーツ探し」に関しては実際に探すのは 40 歳を過ぎてからが多い（徳永，2015）ということからも今後の継続的な調査が必要であると考える．

引用文献

網野武博（2019）．里親制度の方向性と心理的支援，福祉心理学研究，16(1), 7–13.

Brodzinsky, D.M., Schechter, M. & Henig, R.M.(1993). Being adopted: The Lifelong Search for Self, New York: Anchor Books.

Erikson, E.H.(1968). Identity: Youth and Crisis, W.W.Norton & Co., Inc(エリクソン, E.H.　岩瀬庸理訳（1973）．アイデンティティ青年と危機，金沢文庫）.

深谷昌志・深谷和子・青葉紘宇（2013）．社会的養護における里親問題への実証的研究――養育里親全国アンケート調査をもとに，福村出版.

平石賢二（2011）．思春期の反抗と親のストレス，教育と医学，5, 22–28.

Hoops, J.L.(1990). Adoption and Identity Formation, The Psychology of Adoption, Oxford University Press, 144–166.

Howe, D. and Feast, J.(2003). Adoption Search and Reunion: The Longterm Experience of Adopted Adults, British Association for Adoption and Fostering.

和泉広恵（2006）．里親とは何か――家族する時代の社会学，勁草書房.

金山佐喜子・金山元春（2006）．臨床心理学からみた里親養育，心理臨床学研究，24(5), 601–605.

家庭養護促進協会（1998）．血のつながりを越えて親子になる，家庭養護促進協会大阪事務所.

家庭養護促進協会（1999）．大人になった養子たちからのメッセージ，家庭養護促進協会大阪事務所.

家庭養護促進協会（2004）．ルーツを探る，家庭養護促進協会神戸事務所.

家庭養護促進協会（2007）．真実告知ハンドブック，家庭養護促進協会神戸事務所.

河村茂雄（2007）．ライフラインとは，心のライフライン，第 5 版，誠信書房.

Kirk, H.D.(1964). Shared Fate: A Theory of Adoption and Mental Health, New York: The Free Press of Glencoe.

Kirk, H.D.(1988). Exploring Adoptive Family Life The collected Adoption Papers of H.David Kirk, Ben–Simon Publications.

小泉智恵（2018）．生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーングを考える研究会報告書，お茶の水女子大学ジェンダー研究所，78–84.

Korff,L.V. & Grotevant,H.D.(2011). Contact in Adoption and Adoptive Identity Formation: The Mediating Role of Family Conversation, Jaurnal of Family Psychoology, 225(3), 393–401.

厚生労働省（2017）．特別養子縁組制度の利用促進の在り方について，児童虐待対応における司法関与及び特別養子縁組制度の利用促進の在り方に関する検討会.
www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000169541.html
（2019 年 8 月 1 日）

厚生労働省政策統括官付参事官付社会統計室（2018）．平成 29 年社会福祉施設等調査報告.
www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/.../index.htm
（2019 年 8 月 1 日）

古澤頼雄・富田康子・石井富美子・塚田―城みちる・横田和子（2003）．非血縁家族における若年養子へのテリング――育ての親はどのように試みているか？，中京大学心理学研究科・心理学部紀要，3(1), 1–6.

ロング朋子（2019）．新生児特別養子縁組の実際――縁組三者のこころの揺れに伴奏する，こころの科学，206, 27–31.

Melina, L.R.(1986). Raising Adopted Childen, Harper & Row Publishers, Inc.(メリナ, L.R., 伊坂青司・岩崎暁男訳（1992）. 子どもを迎える人の本――養親のための手引き, どうぶつ社).

宮里慶子・森本美絵（2012）. 養子縁組里親, 養親の抱える困難とその対処――里親支援枠組みからの離脱とスティグマ, 千里金蘭大学紀要, 9, 1–12.

森和子（2005）. 養親子における「真実告知」に関する一考察――養子は自分の境遇をどのように理解していくのか, 文京学院大学人間学部紀要, 7(1), 61–88.

森和子（2017）. 血縁によらない親子関係の再構築――真実告知後の養子と養母のやりとりの記録から, 家族心理学研究, 30(2), 134–148.

森和子（2019）.「親になる」ことについての養母の心理的変容プロセス――複線径路・等至性モデル（TEM）による分析を通して, 文京学院大学人間学部研究紀要, 7(1), 71–84.

中山哲志（2017）. 発達障害児を抱える里親の養育困難に関する実証研究（研究成果報告書）平成26~28年度文部科学省科学研究費補助金助成基盤(C)(課題番号26380772).

中山哲志・深谷昌志・深谷和子（2018）. 子どもの成長とアロマザリング, ナカニシヤ出版.

日本財団（2016）. 養子縁組家庭に関するアンケート調査結果報告書.

野辺陽子（2011）. 実親の存在をめぐる養子のアイデンティティ管理, 年報社会学論集, 24, 168–179.

Pacheco, F. & Eme, R.(1993). An outcome study of the reunion between adoptees and biological parents, Child Welfare: Journal of Policy, Practice and Program, 72(1), 53–64.

眞保和彦（2019）. 里親制度における心理的支援への期待, 福祉心理学研究, 16(1), 14–17.

徳田治子（2004）. ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ――生涯発達の視点から, 発達心理学研究, 25(1), 13–26.

徳永祥子（2015）. 日本におけるライフストーリーワークの課題と展望, ライフストーリーワーク入門――社会的養護への導入・展開がわかる実践ガイド, 山本智佳央・楢原真也・徳永祥子・平田修三編著, 明石書店, pp.139–144.

Triesliotis J., Feast, J., & , kyle. F.,(2005). The Adoption Triangle Revisited-A study of Adoption, searched reunion experiences, British Association for Adoption and Fostering.

富田康子（2010）. 育て親家族におけるテリングの効果についての探索的検討, 鎌倉女子大学紀要, 18, 27–38.

Wrobel G.M., Grotevant H.D., Samek. D.R. & Korff L.V.(2013). Adoptees' Curiosity and Information-Seeking about Parents in Emerging Adulthood: Context, Motivation, and Behavior, International Journal of Behavioral Development, 37, 441–450.

（2019.9.13 受稿, 2019.10.8 受理）